

介護職員のスキルアップのための介護技術教育プログラムの検討

An Examination of a Care Technical Education Program for Skill up of Care Staff

三富 道子

MITOMI Michiko

天野 ゆかり

AMANO Yukari

木林 身江子

KIBAYASHI Mieko

はじめに

社会福祉制度が大きく変化し、福祉サービスの利用量は確実に増加している。その中で、サービスの質の確保のために、福祉人材の資質向上と専門的知識・技術の習得が求められている。介護における資質の向上は、利用者の生活の質の向上を図るために、また、介護職者の負担を少なくするためにも重要である。要介護者に提供される介護技術の中で移動と移乗の技術は、大きな比率を占める。これまでの移動と移乗の技術は、ボディメカニクスを活用し、介護者が効率的に介助する方法を中心に教授されてきた。

本研究では、効率性ではなく要介護者が持っている能力、とりわけ「動きの感覚」を介護者とともに活性化させ、セルフコントロールの生活を送ることを可能にするための、新しい介護技術教育プログラムを作成しようとするものである。このプログラムの習得に向けた講習を静岡県下の介護職員に定期的に開講することで、介護職員の資質の向上を図ることができるのではないかと考えている。筆者らは、本年度、人間の自然な動きの理解を促すためにキネステティクスの概念を理解するとともに、講習会に参加した。また、キネステティクスの研修会を、介護職員へのスキルアップのための研修への動機付けに開催した。これらの経験をもとに、導き出された課題に沿って教育プログラムのあり方を検討した。

1. 介護技術における移動・移乗技術と介護職員の職業教育の背景

介護技術の中で移動・移乗の技術の方法は、数多く報告されている。中でも1991年に発表された紙屋克子氏による『新しい体位変換のテクニック』（1991年、中央法規）は、今日の介護技術の中心的なものである。1999年には、人間工学の立場から小川鑛一著『看護動作を助ける 基礎人間工学』（1999年、東京電機出版局）が出版されている。しかし、この間の介護技術に関する方法は、介護技術のテキストに代表されるように従来から実施されている看護技術の転記か、もしくは、紙屋氏の方法の紹介にとどまり、新しい理論や方法の報告はない。

2002年になると澤口祐二氏により、『さあさんのかかってキネステティック』（2002年、日総研出版）が出版された。これと同じ年に、看護の分野で塚田貴子、徳永恵子氏らが「ボディメカニクスとキネステティックの違い—人の『自然な動き』への着眼（特集 看護におけるキネステティック体位変換の革命）」（2002年、コミュニテイクア4巻5号、日本看護協会出版27-29）を発表し、それまでの介護技術の方法と考え方を一変した。2003年には、キネステティックの開発者であるフランク・ハッチ及びレニー・マイエッタの共著『看護・介護のためのキネステティック』（2003年、日総研出版）が、翻訳されている。2004年には、理学療法士である山本康稔、佐々木良氏による『もっと！らくらく動作介助マニュアル』（2004年、医学書院）が出版されている。2005年には、

ノルウェー人のベヤ・ハルヴォール・ルンデ著『移動・移乗の知識と技術』（2005年、中央法規）が、介護者の腰痛予防を念頭に要介護者を持ち上げない手法について提起している。

いずれの方法も人間の自然な動きに着目して開発されており、介護者及び要介護者双方にとって負担が少ないとしている。しかし、実際これらの方法を体験してみる中で、いくつかの違いを感じる。キネステティクスの方法以外は、介護者側の負担軽減を強調するあまり、要介護者が自分の能力を確認しないまま、介護者主導の移動・移乗技術の提供になり、要介護者の活性化にはつながらないばかりか、無理な姿勢を要介護者に強いることになる。

ところで介護福祉士の登録者数の年次推移は図1の通りである。

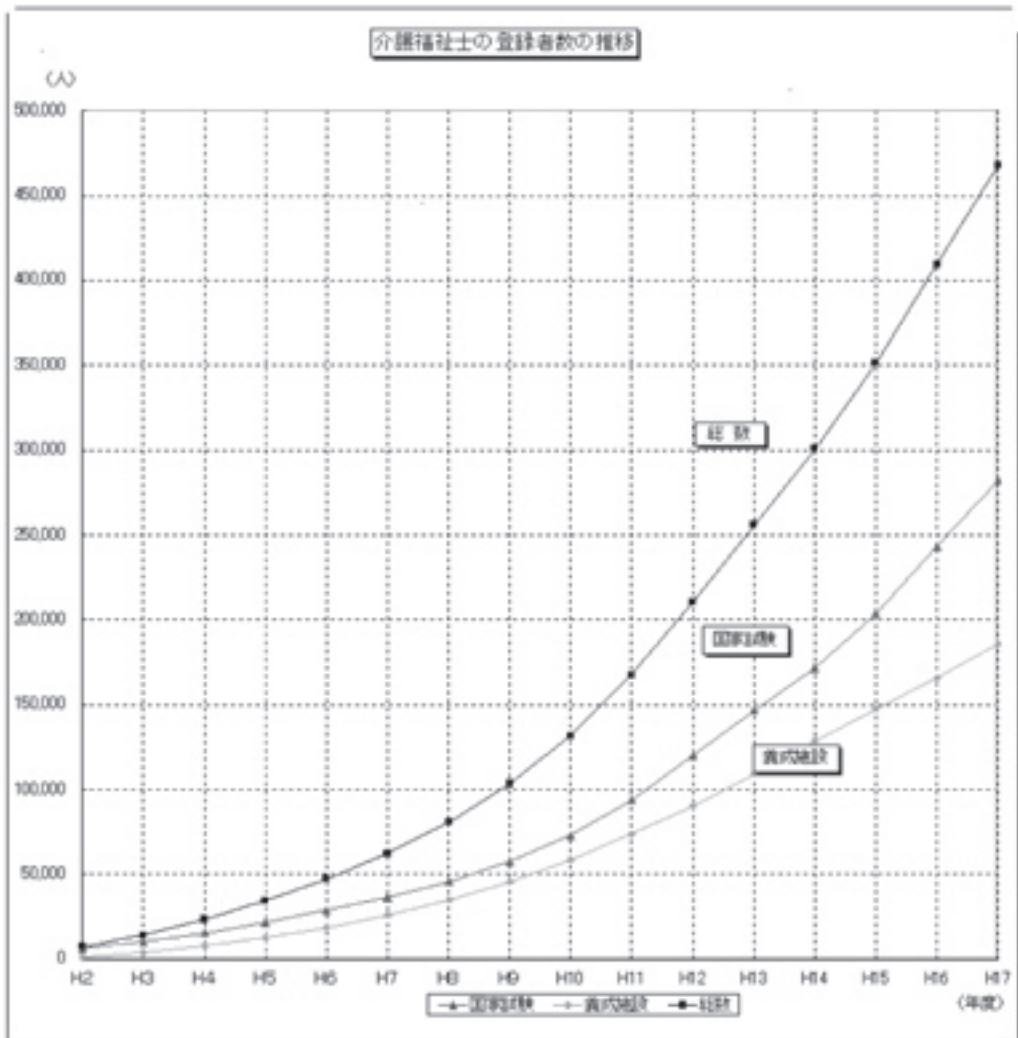


図1 介護福祉士の登録者数の推移

厚生労働省（2008）「生活し福祉一般：社会福祉士・介護福祉士等」

(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/shakai-kaigo-fukushi6.html>,2009.1.5)

介護福祉士資格取得者は、養成校出身者より国家試験を受験した実務経験者の方が圧倒的に多い。これは、介護福祉士養成開始時から変わってはいない。また、筆者らは職員から「技術は現場でいくらでも学ぶことができる」という言葉を、よく耳にする。これは、移乗技術の研究が多数されていることからすると、にわかには理解しがたいとはいえ、否定するわけにはいかない現実である。福祉あるいは介護が科学性よりも、情緒的側面を強調することによる産物とも考える。

2. 介護職員のためのスキルアップセミナーの開催とアンケート調査結果から

筆者らは、介護の質を確保するために介護職員の研修が欠かせないと考えている。とりわけ介護技術の中で移動・移乗技術は、日常生活に欠くことができないばかりか、適正な方法を実施しないと要介護者への負担ばかりでなく、介護者自身への負荷もかかる。筆者らは、介護技術の中でキネステティクスの理論に関心を持ち、介護職員のスキルアップの方法に利用できないかと考えた。そのため、筆者らが、まず講習会を受講しキネステティクスの概念を含め自分自身の動きの感覚を体験するとともに、その方法を習得することとした。受講した講習会の内容は、表1のとおりである。

表1 講習会の受講内容

講習会名	月 日	場所
キネステティクス・ベーシックコース	平成20年2月21日	静岡
	2月22日	
	3月14日	
	3月15日	
キネステティクス・アドバンスコース	平成20年6月27日～29日	広島

キネステティクスは、体験型講習である。講習会でできた6つの概念は、アクティビティーをすることにより自分自身の動きや人間の体の構造を体感する中で、容易に理解することができた。しかし、これはあくまで感覚的に理解したのであり、すぐにアクティビティーとして再現できるものでない。また、個人の能力により、その体験に大きな差ができることと、これらの概念に合わせた身体の自然な動きが、すぐに習得できるものではない。そのためには、繰り返しキネステティクスのトレーナーから学習をする機会と、自分が再現できるまでの反復学習する時間ならびに仲間が必要であると考えられる。

次いで、静岡県下の福祉施設で働く介護職員のためのスキルアップセミナーを開催することである。その上でスキルアップセミナー受講者にアンケート調査を実施することで、受講者の職業教育を巡る背景はもとより動きの介助についての関心を調査することにより、今後に必要なセミナーのプログラムを検討することである。まず、セミナー開催のプレ調査として、介護普及センターが開催した「キネステティクス紹介コース」の受講生にアンケート調査を実施した。合わせて本年度のセミナーを表2のように開催し、紹介コース受講生にアンケート調査を実施した。本年度のねらいは、介護職員に新しい介護技術を体験する中で今後のセミナーへの関心を喚起しようとするものである。この試みは、キネステティクスを普及しようとするためのセミナーではない。

表2 スキルアップセミナーの開催

講習会名	月 日	人 数
ケアのためのキネステティクス実習コース	6月23日	10名
ケアのためのキネステティクス紹介コース	7月10日	30名
ケアのためのキネステティクス紹介コース とポジショニングセミナー	9月27日 9月28日	20名
動きの介助の基礎理解	2月21日～22日 3月21日～22日	20名

アンケート結果から、次のことが特徴付けられた。まず、キネステティクスを知ったのは、67名中講習会の案内状が28名(42%)、介護職員24名(36%)、看護師5名(8%)本・雑誌4名(6%)、インターネット4名(6%)、その他15名(22%)であり(複数回答以下同じ)、広く流通する雑誌やインターネットによる認知は非常に限られる。又、介護技術を学習した場所は、職場内34名(51%)、ヘルパー講習会33名(33%)、先輩20名(30%)介護養成校15名(22%)、学習していない8名(12%)、その他8名(12%)である。これに示されるように学習の場所は、職場内が最も多く、次いで先輩、講習会、養成校の順である。

職場において、動きの介助を学ぶ必要性については、「大いに感ずる」、「感ずる」と答えた者が65名(97%)、「どちらでもない」2名(3%)、「思わない」、「まったく思わない」0名(0%)である。以上の結果から、日々の介護実践の中で動きにかかわる移動・移乗の介護技術に、何らかの困難性を持ち改善を図りたいと考えていることを教えてくれる。

以上のことから福祉現場で働く介護職員は、新しい技術の情報収集が限定的であり、講習会の案内は効果的であると思われる。仕事の中でも学習の必要性を考えていることから、スキルアップのための講習会を提供することは、職員のニーズに応じて介護の質を向上するためにも、意味のあることと考える。

3. 今後の課題

キネステティクスは、体験するものであって、その方法論を学ぶものではない。澤口氏は、「キネステティクスは、人の動きを分析するツールです。・・・『この動き方をしなさい』という模範を示すものではありません。・・・キネステティクスにはいわゆるマニュアルは必要ありません。自分の体がマニュアルです。」¹⁾ というように、自分の体を使用して動きを分析するのであって、それが一つの方法(やり方)を覚えるものではないといっている。しかし、概念を体験するアクティビティを再現するには、一定の媒体は必要であり、キネステティクスの認定トレーナーによる講習だけでは、大きな制約があると考えられる。キネステティクスが仮に優れた技術であったとしても、万人がこれを習得するには、第1の課題である。他方、ヨーロッパのドイツ語圏における看護教育の中で、実際学生に教育されており、なおかつその概念が定着し、実践されていると聞いている。^{2) 3)} こうした事実を確認するためには、指導内容を調査する必要があると考える。これについて筆者らは、現地における教育プログラムの調査と看護教育のテキストを入手することを予定している。

第2の課題は、介護者自身の動きや要介護者の動きに関する能力のアセスメントする必要性である。澤口氏は、これを分析するツールといっている。いずれにしても、人間の身体の構造を理解

したうえでアセスメントを実施する知識が必要であると考え。そのためには、介護職員のアセスメント能力をつける教育プログラムが必要である。澤口氏は、また、「キネステティクスには『向いていないかもしれない』と感ぜられる人がいます。」⁴⁾とも言っている。学習する能力がないのではなく、下地ができていないと言うものの、筆者らが感じた個人の能力に大きな差があることを、澤口氏自身もみとめていることになる。これらを解決するには、体験するだけで解決することにならないばかりか、どんなに優れた技術であっても全ての介護職員への普及が難しい。

第3の課題は、キネステティクスの用語に関する制約性である。商標登録によるキネステティクスという用語の使用制限だけにとどまらず、キネステティクス用語による表現をしなければならない制約である。これは、最も大きな課題である。キネステティクスの用語で無ければ説明できないものか、検討が必要である。

以上のことから、筆者らは次のような教育プログラムの試案を作成した。

- ① 人間の体の構造 自分の身体や要介護者の身体の構造を理解する。
- ② 介護過程 介護者自身の動きや要介護者の動きに関する能力についてアセスメントする能力を身につける。
- ③ 移動・移乗の技術 キネステティクスだけにとどまらず、その他の介護技術を組み合わせたものを開発することである。

おわりに

介護職員の職業教育を考えると、資格取得のみにかかわらず幅広い教育機会が必要であると考え。今回開催したスキルアップセミナーを出発点に、今後求められる研修会を模索している。明らかになった課題をもとに、新たな教育プログラムのさらに立ち入って試案を作成していきたい。

引用文献

- 1) さあさんの秘密の小窓 (<http://estmlgy.ddo.jp/sub08/kinaestetik1.html>,2009.1.7)
- 2) Frank,hatch,・Lenny,Maietta・Suzanne,Schmidt Interaktion durch berü und Beweegung in der pflege (1999) (= 2003 澤口祐二翻訳『看護・介護のためのキネステティク』日総研出版, 12.)
- 3) 塚田貴子 (2002) 「看護そのものへの回帰—ドイツでの"キネステティク"研修記」『看護』54 (12) ,84-87.
- 4) さあさんの秘密の小窓 (<http://estmlgy.ddo.jp/sub08a01.html>,2009.1.7)

参考文献

- 塚田貴子、徳永恵子 (2002) 「ボディメカニクスとキネステティクの違い—人の『自然な動き』への着眼 (特集 看護におけるキネステティク体位変換の革命)」『日本看護協会出版会』4(9), 27 - 29.
- 本名靖・西尾孝司・平方朋子 (2004) 「腰痛を防止する新しい移乗介助技術の開発に関する研究」『東海大学健康科学部紀要』(東海大学) 9, 19 - 28.
- 山本康稔、佐々木良 (2004) 『もっと!らくらく動作糧所マニュアル』医学書院.
- Per,Halvor,Lunde Forflythningskunnskap (= 2005 中山幸代・嶋田智也監訳『移動・移乗の知識と技術』中央法規.

II. あなたの職場についてお尋ねします。

1. 動きの介助を学ぶ必要性を感じますか？

- a. 大いに感ずる b. 感ずる c. どちらとも言えない
d. 感じない e. 全く感じない

2. 研修を受けやすい環境にありますか？

- a. 大いに受けやすい b. 受けやすい c. どちらとも言えない
d. 受けにくい e. 全く受けにくい

3. 職場では、どんな研修をしていますか？具体的な内容を記入してください。

--

III. 本日の研修に参加した感想をお尋ねします。

1. 研修内容はわかりやすかったですか？

- a. とてもわかりやすかった b. わかりやすかった c. どちらとも言えない
d. わかりにくかった e. とてもわかりにくかった

2. 動きの介助の学習の必要性を感じますか？該当するところに○をつけてください。

- a. 大いに感ずる b. 感ずる c. どちらとも言えない
d. 感じない e. 全く感じない

